

原の辻遺跡 令和元年度調査成果

東アジア国際シンポジウム

『魏志倭人伝の中の倭と韓 - 烏丸鮮卑東夷伝にみる東アジア交流 -』

令和元年度 県内発掘調査成果概要

早岐瀬戸遺跡・中島遺跡・畑中遺跡・島原道路関連・市町支援

杵岐高校生徒の研究発表

保存処理について・オープン収蔵展示紹介

発行／長崎県埋蔵文化財センター



早岐瀬戸遺跡（佐世保市早岐）

はる つじ  
原の辻遺跡 令和元年度調査成果

原の辻遺跡北側の安国寺が位置する高台の隣接地である<sup>みやくり</sup>閨繰地区と、遺跡の南側丘陵端部に位置する大川地区で発掘調査を実施しました！

大川地区近世遺構



<sup>みやくり</sup>閨繰地区は過去の調査で弥生時代中期の墓域が確認されたところで、甕棺墓と石棺墓が列状に配置されていました。今回の調査区はその隣接地で遺構の広がりを確認するために3箇所の調査区を設定し掘り下げを行いました。掘り下げを進めると圃場整備による造成土が厚く堆積しており、約2m下に弥生時代の遺物包含層が確認されたものの掘り広げることが困難となったため記録を取り現状復旧を行いました。遺物包含層からは弥生土器をはじめ、磨製石剣や陶質土器などの小片が出土しています。

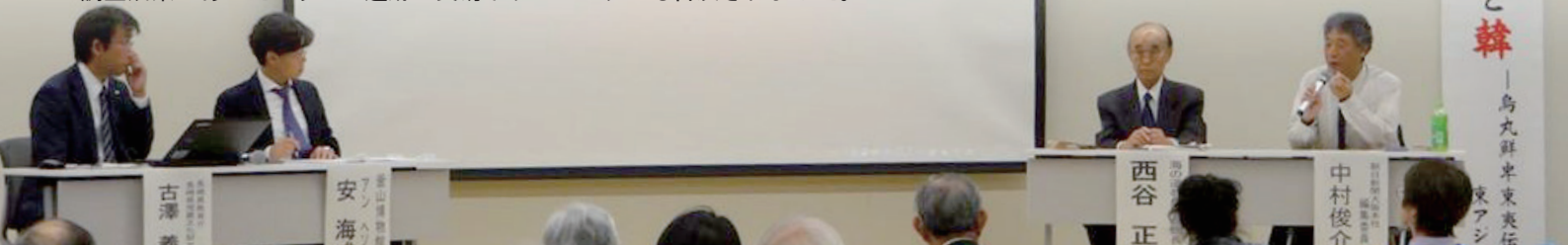
大川地区は過去の調査で古代（8世紀末から10世紀中ごろ）の貿易陶磁器（白磁や青磁等）が出土しており、<sup>かんが</sup>官衙跡（役所跡）の可能性をもつところでした。現況は荒廃した水田で平坦な地形ではありますが、発掘調査を進めると近世以降の饅頭畑や水路と思われる痕跡が確認されました。調査区南側の丘陵端部には古代から中世にかけての遺物包含層が確認され、青磁や土師器をはじめ、石帯の一部や銅銭などが出土しました。また、かなり浅いところに黄褐色の粘質土があり、旧石器時代の黒曜石剥片なども出土しています。

東アジア国際シンポジウム『魏志倭人伝の中の倭と韓 - 烏丸鮮卑東夷伝にみる東アジア交流 -』

今回のシンポジウム長崎会場は、長崎県埋蔵文化財センター10周年を記念して長崎県庁で実施しました。海の道むなかた館館長西谷正氏による基調講演「<sup>うがんせんびとういでん</sup>烏丸鮮卑東夷伝の考古学」では、東夷伝に記された中華民族の異民族に対する考え方について言及され、扶余から高句麗、<sup>ゆうろう</sup>挹婁、<sup>わい</sup>濊、韓と続く各地域の考古学的な成果について主な遺跡や遺物を交えてご講演いただきました。

また当センター古澤義久主任文化財保護主事は「魏志倭人伝における往来関係記事と一支国」と題し、魏志倭人伝に明記されている漢、魏、三韓諸国との外交の記載を考古学的に裏付けられる資料を紹介し、魏志倭人伝の記載が北部九州の情報を中心に明記されている可能性が高いことを指摘しました。釜山博物館学芸研究士<sup>アンヘッソン</sup>安海成氏は「三韓時代韓半島南部と東アジア社会の変動ー『三国志魏書東夷伝』韓・辰韓・弁辰条を中心にー」と題し、東夷伝に記載された三韓時代の歴史的事象について主に威信財としての鉄器を中心とした考古学資料の変化を用い裏付けられることを指摘されました。

その後のパネルディスカッションでは、朝日新聞大阪本社編集委員中村俊介氏をコーディネーターとし、魏志倭人伝の記述に関連し、杵岐における原の辻遺跡とカラカミ遺跡との関係や一支国と対馬国との性格の違い、原の辻遺跡での交易活動がどのように行われていたか、文字は使われていたかなど様々な視点での討論が行われました。杵岐会場では杵岐市社会教育課係長松見裕二氏が「杵岐における交流の実態ー魏志倭人伝に記された一支国の世界ー」と題し、杵岐市内にある三つの集落遺跡の性格や近年様々な新しい調査成果があったカラカミ遺跡の交易ネットワークにも言及されました。



倭と韓

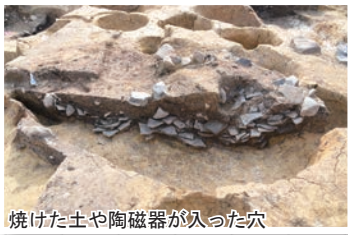
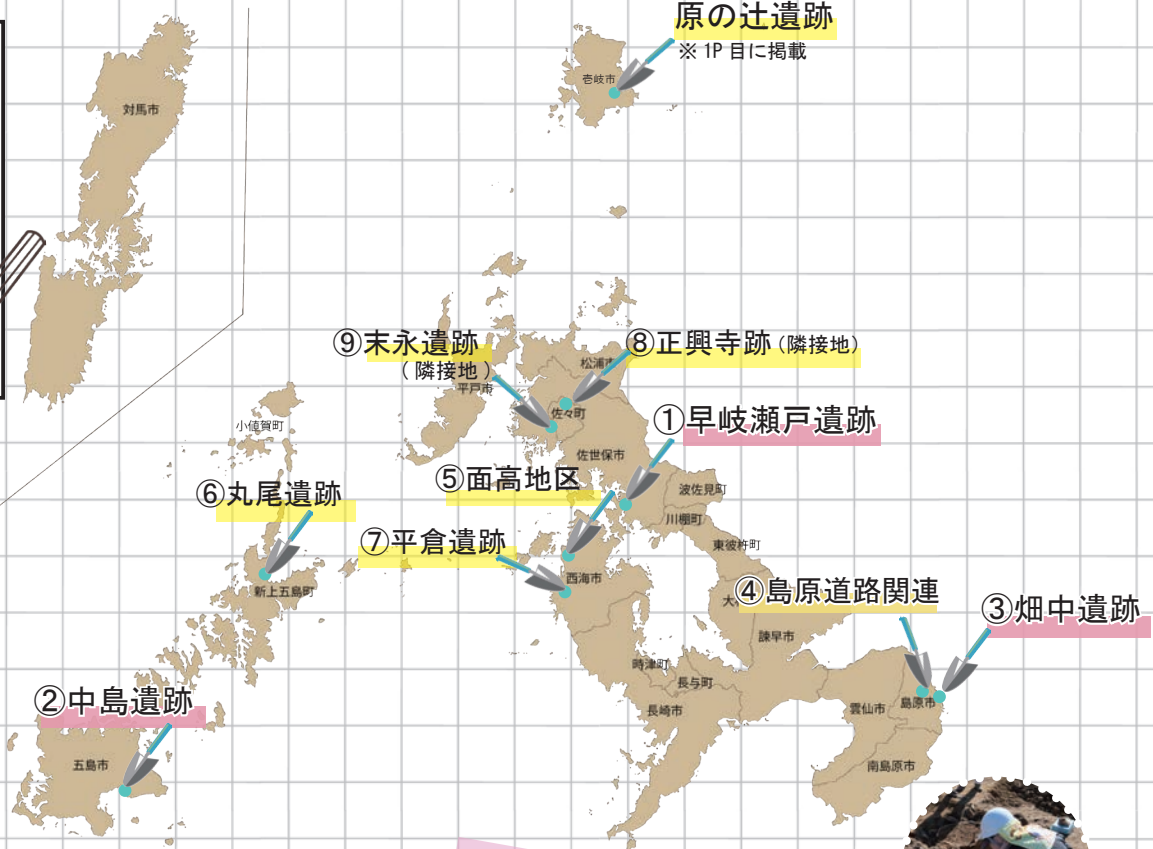
ー烏丸鮮卑東夷伝にみる東アジア交流ー

# 令和元年度 県内発掘 調査概要

※④～⑧は市町支援

…本調査

…範囲確認調査



焼けた土や陶磁器が入った穴

## はいきせと ①早岐瀬戸遺跡 (佐世保市早岐)

早岐瀬戸遺跡は佐世保市南部の早岐地区に位置し大村湾と佐世保湾を結ぶ早岐瀬戸に面する遺跡で、早岐川河川改修工事に伴い発掘調査を行っています。早岐地区は古くから水陸の交通の結節点となる要衝地で、現在も400年前から続くといわれる「早岐茶市」が行われています。早岐瀬戸遺跡周辺は1653年から平戸藩による埋立が行われ、港湾、宿場などさまざまな性格を持つ町として発展してきました。また記録により江戸時代中頃と明治時代に計3回の大きな火災があったことが分かっています。

令和元年度の調査では三川内焼を中心に江戸時代から明治時代の陶磁器が大量に出土し、合計700基を超える柱穴・廃棄土坑や溝跡、石列、道路跡が見つかりました。調査区の一部では赤く焼けた土と灰色の土が交互に堆積している状況が確認され、焼けた土や炭と一緒に瓦や陶磁器の破片が多量に見つかる遺構もあり、火災後の片付けや整地の跡と考えられます。また、調査区の東端で直径40～50cmほどの柱に四角く穴を開けて横木を通した構造物や石組みの炉跡が見つかりました。現在類例を調べていますが、酒や醤油の醸造に使う搾り機の下部構造ではないかと考えています。この構造物については令和2年度に継続して調査を行い、構造や性格を調べていきます。



横木を通した構造物



石組カマド



焼けた土と灰色の土が交互に重なった整地の跡



柱材が見つかった柱穴

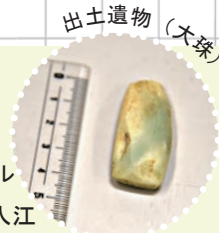


## ② 中島遺跡 (五島市浜町)

五島列島最南端の福江島南側にある遺跡で、福江島のシンボルとも言える鬼岳の麓、溶岩台地の縁辺に立地し、富江湾奥部の入江にあたります。目の前には美しい青緑色の大浜海水浴場がひろがります。隣に接する大浜遺跡は、弥生時代の墳墓や奈良・平安時代の馬・牛の骨、中央との関係を示す土器の出土で古くから有名ですが、中島遺跡は縄文時代のドングリ貯蔵穴が発見されたことで知られています。

7月から9月にかけて行われた発掘調査の調査区は、かつてドングリ貯蔵穴が発見された場所から2～3mほど台地斜面を上った地点にあたります。縄文時代後期を主とした土器片や磨石・<sup>すりいし</sup> 敲石・<sup>たたきいし</sup> 台石・<sup>だいいし</sup> 石斧等の石器が多く出土しました。珍しいものでは、ヒスイに似た石材で製作途中の装飾品(大珠)も見付かっています。

特に多く出土した磨石・敲石・台石は、ドングリなどの木の実を磨り潰したりする「堅果類加工石器」と呼ばれるものです。今回の調査地点はおそらく、ドングリ貯蔵穴に一時保管していたドングリを加工する場所であったと考えられます。



毎日たくさんの土器片が!

石斧

磨石

台石

出土遺物の一部

## ③ 畑中遺跡 (島原市亀の甲町)

島原半島北東部の海沿いに立地する広大な遺跡で、平成30年度に範囲確認の調査を実施、令和元年度に本調査を行いました。縄文時代や中世の遺物が少なからず出土しましたが、200㎡に満たない調査区で想定外だったのは鎌倉時代の溝跡が発見されたことです。溝跡の東岸と底面を確認できましたが、西岸は調査区外に続き、深さは1.6m以上、幅は推定で4m以上あります。壁面・底面は平滑に造られています。また、同じ時代の遺物を含む集石遺構も検出され、内部では人骨と見られる骨片が出土しました。

出土遺物では、輸入陶磁器や土師質土器など鎌倉時代を中心とした時期が主で、他に縄文時代早期の押型文土器片、晩期の土器片、石器剥片や弥生時代中期の土器片が少量出土、古銭(祥符元宝)も出土しました。また、鉄を加工する際に出る鉄滓が多く出土しているのが特徴的です。30年ほど前の発掘調査では、同じく鎌倉時代の建物跡や溝跡、鍛冶遺構が検出されていることから、これに関係する屋敷地や鉄づくりの姿が思い浮かびます。今後の遺物整理作業や報告書作成で詳しく検討していきます。



出土遺物



集石遺構と骨片



溝跡

## ④ 島原道路関連 (島原市津吹町～有明町)

島原半島と諫早市中心部を結ぶ高規格道路・島原道路の建設に伴い、島原市出平から有明方面への区間で平成30年度から試掘・範囲確認調査を継続しています。令和元年度は長貫B遺跡、寺中A遺跡、原口B遺跡、灰ノ久保遺跡、下源在高野遺跡の5遺跡及びその隣接地で、広大な用地の中に試掘坑を掘削して遺跡の有無を確認していきました。

今回の調査で特に大きな発見は、原口B遺跡の旧石器時代と見られる地層から石器が出土したことで、市内では初めての事例です。約3万年前の始良丹沢火山灰に由来すると見られる硬質の地層から、佐世保市南部を原産地とする黒曜石製の剥片3点が見つかりました。隣町の雲仙市では、旧石器時代の石器製作跡が多く見つかった百花台遺跡が有名です。島原市内でもこのような遺跡が眠っているかも知れません。



原口B遺跡の試掘坑



見付かった旧石器時代の石器剥片

# 令和元年度 市町支援

## ⑤<sup>おもだか</sup>面高地区農地基盤整備事業（西海市）

西海市北部に位置する面高地区で約73haの農地基盤整備事業が計画されました。この地域は、夏はスイカ、冬は切り干し大根の原料となるダイコンの生産地であり、標高約60～75mの丘陵台地上に位置しています。対象地の中には周知の遺跡はなく、現地踏査を行った結果、黒曜石剥片などが多数採集されたため、遺跡が存在する可能性が高い2地点（A・B）に計22箇所の調査区を設定し試掘調査を実施しました。A地点は石鎌を含めて腰岳産や針尾産の黒曜石製石器が多数表採されましたが、発掘調査を行った結果、遺物包含層は確認されませんでした。またB地点は耕作土を掘り下げると岩盤が確認され、遺物等は発見されませんでした。表面に散布する遺物がどこから入り込んだものなのか、課題が残る調査となりました。



A 地点調査区近景



土層堆積状況

## ⑥<sup>まるお</sup>丸尾遺跡（新上五島町）

丸尾遺跡は、旧新魚目町に所在する番岳の南東側に位置する標高約30mの丘陵上にある遺物包含地で、昭和48年ごろに旧石器時代から縄文時代にかけての石器などが表採されたといわれています。もともと畑地でしたが、最近では宅地化が進みつつあるところ です。令和元年7月に発生した集中豪雨により発生した土砂崩れにより魚目中学校の校舎の一部が埋没したことから、急遽崖面の災害復旧工事を行うこととなりました。工事の範囲は小規模ではありましたが、遺跡の南端にあたることから3箇所の調査区を設定し範囲確認調査を実施しました。良好な赤褐色粘土層が確認されましたが、遺物や遺構は確認されませんでした。



調査区近景

## ⑦<sup>ひらくら</sup>平倉遺跡（西海市）

平倉遺跡は、西海市西部の<sup>すもうなだ</sup>角力灘に面して突出する標高約40mの丘陵頂部に位置しています。昭和57年に行われた分布調査により石器などが表採された遺跡で、現在は畑と墓地があり、近隣には住宅地が造成されています。調査は消防格納庫の建設に伴うもので、それに先立って対象範囲（約250㎡）に2箇所の調査区を設置し、範囲確認調査を実施しました。表土からは黒曜石の剥片や近世陶磁器がわずかに出土しましたが、表土の下は地山であり、遺物包含層は確認されませんでした。



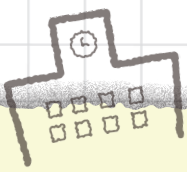
調査風景

## ⑧<sup>しょうこうじ</sup>正興寺跡（隣接地）（佐々町）

正興寺跡は、佐々町北部の佐々川上流域の河岸段丘上にある中世の寺院跡です。遺跡に隣接する畑地に民間の保育所建設が計画されたため、工事に先立ち4箇所の調査区を設定し試掘調査を実施しました。調査の結果、柱穴や縄文土器や黒曜石剥片などの遺物が確認されたため、この地域に遺跡があったことは間違いなく、周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図に登録しました。ただ、今回の工事予定地は表土直下から遺物が出土しており摩滅も顕著であることから、遺跡が良好に残っている状況とは言えませんでした。

## ⑨<sup>すえなが</sup>末永遺跡（隣接地）（佐々町）

末永遺跡は佐々町南東部の丘陵部に位置する縄文時代の遺物包含地です。平成17年度に西九州自動車道建設に伴って範囲確認調査を行った地点の隣接地であり、現在は畑地となっています。高規格道路が開通したことにより佐世保市内からの交通の便が良好になったことなどからこの地域に宅地造成の計画が作られました。その設計を行うにあたり4箇所の調査区を設定し試掘調査を実施しました。北側の調査区2箇所では耕作土直下に地山（岩盤）があり、遺構・遺物などは確認されませんでした。南側の調査区2箇所については、地表下約60cmの深さで黒褐色の遺物包含層が確認され、黒曜石剥片が出土しました。したがって、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図に登録することにしました。



# 沓岐高校生徒の研究発表

東アジア考古学研究室では、奈良大学が主催する「全国高校生歴史フォーラム」（通称、「地歴の甲子園」）へ研究論文を応募する取組を3年前の平成29年度から支援しています。

心掛けていることは“歴史の面白さ”を実感できる支援。専門家と一緒に地表調査に出かけ、「自分たちでホンモノの遺物を拾うことができた！」その感動がその後の妥協を許されない難しい遺物の実測や論文作成上の苦難の連続にも心を折らすことなく最後までやり抜く原動力となっています。

令和元年度は「未解明の古墳の集落に迫る～沓岐・車出遺跡とその遺物から見た巨石古墳との関係～」と題し、弥生時代から古墳時代まで続く集落遺跡（車出遺跡）周辺の古墳と、古墳時代後期に表れる巨石古墳との形状の違いを測量調査から検討をおこない、造営者の違いについて考察しました。結果、応募総数143編の中から優秀賞5編に選ばれ、上位3編に贈られる賞の1つ「奈良大学創立50周年記念特別賞」を受賞しました！

## くるまで 車出遺跡周辺遺物採集

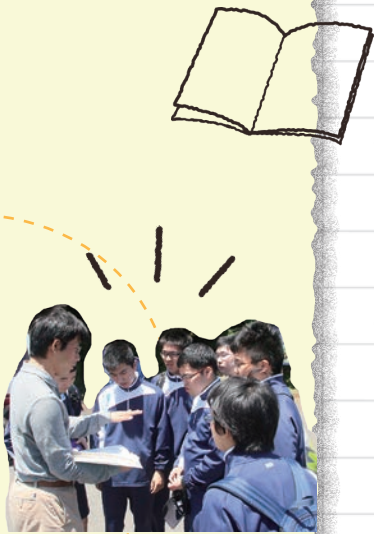


弥生時代の遺跡で有名な車出遺跡周辺で古墳時代の遺物もたくさん拾いました。

## おに いわや 鬼の窟古墳石室内



地表調査と併せて、島内の遺跡を職員と一緒に視察！考察のアイデアを膨らませました。

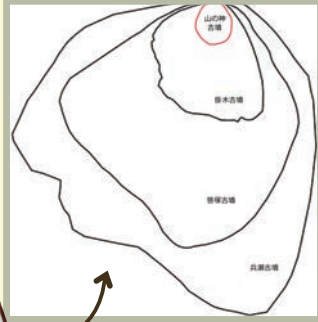


## やま かみ 山の神古墳



車出遺跡から480mの場所にある「山の神古墳」データが全くない古墳。

## 実測図 (巨石古墳との比較)



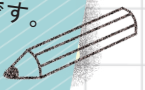
山の神古墳と沓岐の巨石古墳を比べるとこんなに小さい！

「まずはどれくらいのおおきさなのか実測しよう」と、敷道を20分かけて登り...



山の神古墳で平板実測

令和元年度は芦辺町湯岳本村触にある定光寺じょうこうじで、発掘調査も行いました！  
高校生が発掘調査を行うのは、最近では全国でも非常に珍しい取り組みです。この発掘調査の成果をもとに令和2年度の奈良大学歴史フォーラムの研究を行う予定です。



# 保存処理について

## 令和元年度出土品の保存処理

発掘調査では土器や石器、陶磁器をはじめとしてさまざまなモノが出土します。その中には木製品や金属製品のような非常にもろくなっているモノもあり、埋蔵文化財センターではそれらの保存処理を行っています。通常、長い時間土の中に埋まっていた場合、木材は腐り、金属はサビてボロボロになりやがて無くなってしまいます。遺跡から出土するもろいモノは、ひとつひとつがギリギリで耐えている状態なのです。そこで私たちは、人が病気になったときに病院で「診察」し「治療」するように、出土品の材質や状態を調べ、機器や薬品を使って貴重な文化財を長く残すための処理を施しています。

ここでは、令和元年度に処理した<sup>かまふた</sup>吉岐市・釜蓋5号墳出土の鉄製環状鏡板付轡<sup>かんじょうかがみいたつきくわ</sup>の処理を紹介します。金属製品の「病氣」はサビであり、今ある錆びの「除去」と今後の錆びの「予防」、ボロボロになってしまった本体の「強化」が保存処理に求められます。はじめ、<sup>くつわ</sup>轡はサビに覆われ、形がよく分からない状態でしたが、X線を用いたレントゲン撮影によって中の様子をはっきりと見えるようになりました。次に、レントゲン画像を参考に歯の治療で使うようなグラインダーでサビを少しずつ削り落としていきます。また、くっつけられるパーツがあれば接着剤で接合していきます。これで形の復元は完成ですが、レントゲン画像からも分かるように中身がスカスカなため、少しの衝撃でも壊れてしまう可能性があります。そこで、特殊な樹脂を浸みこませ固めることで強度を高める処理を施しました。こうして貴重な文化財を未来へ残し、展示や研究に役立てられるようになります。

### 鉄製轡<sup>くつわ</sup>の処理過程



処理前



透過X線画像



処理後



## オープン収蔵展示紹介

### 長崎県埋蔵文化財センターは開設 10 周年を迎えました！

令和元年度のオープン収蔵展示（第25回）では、センター開設10周年を迎えることを記念し、県教育委員会が発掘調査に関わった長崎県内の代表的な遺跡を紹介する『長崎県の埋蔵文化財展』を開催しました。旧石器時代から幕末までの収蔵品230点を、各遺跡の説明パネルとともにご紹介しました。

現在は、センターの10年間をパネルや出土品とともに振り返る『長崎県埋蔵文化財センターのあゆみ展』を開催中です。当センターでの保存処理を経て初めて公開される出土品なども展示しています。発掘調査の出土品だけでなく、埋蔵文化財センターの役割についても知っていただける企画展となっています。



第26回オープン収蔵展示

『長崎県埋蔵文化財センターのあゆみ展』

2020. 2. 28(金) ~ 5. 31(日)

一支国博物館1階 オープン収蔵展示室

◀ 弥生時代の腕輪状木製品（原の辻遺跡出土）

『長崎県の埋蔵文化財展』にて初めて展示されました！

